

「高度な知の創成と的確な知の継承」。岡山大学の理念のもとに教育・研究を展開する個性あふれる教員たち。研究室を訪ねる。

UZUKA Mariko (46歳)
 ▶1967年 横浜市生まれ
 ▶1991年 上智大学文学部史学科 卒業
 株式会社日本旅行勤務
 ▶1997年 米国ハーバード大学語学研修所ビジネスコミュニケーションコース修了
 ▶2000年 米国インディアナ州立大学で経営学修士取得
 ▶2002年 NCN米国大学機構 スチューデントアドバイザー
 ▶2008年 ボストンオリエンタルコンネクションズ社 不動産マーケティングリサーチ
 ▶2009年 岡山大学言語教育センター 准教授



宇塚万里子

言語教育センター准教授

スタートライン

L-caféの中心で学生を会話に引き込む宇塚准教授。流暢な英語と天性の明るさで、日本に馴染めないでいる留学生や英語を話すことに躊躇している日本人学生を自然に会話に誘う名人だ。「下手でもちつとも構いません。大事なのは、やってみようという気持ち」と宇塚准教授。自身もかつては英語が大の苦手だったという。しかし、社会人になって英語で何かを学びたいと28歳で単身渡米。猛勉強に励み、インディアナ州立大学で経営学修士号を取得し、米国で就職。気がつけば10年が経過し、日常的に英語を使うようになっていた。「とにかくやってみようと飛び込んだけれど、今思うと、英語を学ぶことがその後の人生のスタートラインとなった」と振り返る。「やる気があれば苦手な英語でも話せるようになる。言葉が原因でやりたいことを諦める学生をなくしたい」と願う。

新たな学びの場

毎日150人以上の留学生と日本人学生が交流しながらさまざまな言語や文化を学んでいるL-café。学部や学年、国籍を超えてイベントを企画し、互いの国の料理を食べ比べるなどユニー

ソーシャルラーニングスペース「L-café」で学生同士の関わりから生まれる学びを研究

グローバル人材育成と異文化理解を深化・活性化し、より多くの学生にソーシャルラーニングの機会を提供するため今年5月、津島地区にオープンした「L-café (エル・カフェ)」。前身の「イングリッシュ・カフェ」から管理・運営に携わり、ソーシャルラーニングスペースが学生の語学習得にどう影響するかを研究している言語教育センターの宇塚万里子准教授を訪ねた。



クな活動を行っている。留学生や留学経験のある日本人学生が英語を教える「スチューデント・ティーチャー」は、宇塚准教授の発案。単位を習得できる正規の授業ではないが、教える側の熱意がダイレクトに伝わり満足度は非常に高い。これまで学んだ英語をコミュニケーションのツールとして実践できるスペースを、宇塚准教授は「学生同士の関わりで言語が習得できる新たな学びの場」と位置づける。

成果も挙がっている。L-caféの利用者のTOEICテストの平均スコアは、過去4年間で115.2点上昇。学生の積極的な学習はもちろん、L-caféで他の学生から刺激を受け、英語が飛び交う環境に身を置くことで、いつの間にか理解を深めているという。外国へ留学する学生もイングリッシュ・カフェ開設の2009年から約3倍に増加するなど波及効果もみられる。

グローバル人材の育成へ

日本について学び、日本の友人をつくりたいと願う留学生にとって、L-caféは多くの日本人学生と触れ合える場所。宇塚准教授は、こうした交流をグローバルで活躍できる人材の育成につなげようと知恵を絞る。世界の情

勢を伝えるニュースを題材に、その国の留学生に「家族はどうしているのか」「あなたはこう思うか」と問い掛け、学生目線で考える。「世界で活躍するにはさまざまな国の実情や価値観といったバックグラウンドを理解する必要がある」と話す。

自国の文化や言葉、政治などを理解し、誇りを持てる人材を育てたい。宇塚准教授をはじめとする教職員らの熱意が、着実にL-caféを成長させてきた。「日本に留学するなら岡山大学がおすすめ。なぜなら、L-café(イングリッシュ・カフェ)があるから」とは実際に海外で聞かれた声。L-caféは今、学内外で一層の存在感を放ち始めている。

